自分と同じでない言葉を使う隣人を受け入れること

佐々木（ささき） 冠（かん）（札幌学院大学商学部准教授）

多様性は言語にとって本質的な特性であり、それをなくそうとすることには無理がある。使われなくなる言語がある一方で、言語が分裂することにより新しい言語（方言）が生まれている。言語に多様性があるということは、異なる言葉を使う人間が存在するということである。この当たり前の事実がいじめや差別に結びつくことがある。この小論では、童話「わたしのいもうと」を取り上げ、言語の多様性とどのように向き合っていくべきか私見を述べることにする。

「わたしのいもうと」は松谷みよ子が書いた童話である。作者のもとに届いた妹のいじめ被害を書きつづった手紙の内容をもとにしている。内容は次の通り。「わたし」と「妹」は「妹」が小学4年生の時に引越をする。転校先の学校で「妹」はいじめを受ける。いじめのきっかけは、跳び箱ができないこと、そして言葉が変であること。いじめを受けて家に閉じこもるようになった「妹」が数年後自ら命を絶つ。あまりにも救いのない物語だ。2007年2月15日付北海道新聞朝刊に掲載された記事で、「妹」が自殺する箇所が作者の創作であることを知ったときはほっとした。ただ、方言をからかわれて自殺した人間は現実に存在するので、物語にはリアリティーがある。

いじめのきっかけは複数あるが、その中に言葉が含まれていることに注目したい。引越をした後で「妹」が言葉をきっかけの一つとしていじめの対象になったということは、「私」と「妹」が住んでいた地域の言語＝方言がからかいの対象になっていることを意味する。引越先の方言と「わたし」と「妹」の方言が意思疎通ができないほどの差異を持っていたかどうかは、この童話からはわからない。しかし、時代背景を考えるならば、意思疎通の妨げにならない程度の差異しかなかったと考えるのが自然だ。

意思疎通の妨げにならない程度の差異が問題になっているのだとしたら、情報の伝達の面で不便だからいじめの対象になっているのではないことになる。いじめた子供たちは、作者松谷みよ子があとがきで述べているように「自分とおなじでないものを許さない」という気持ちからいじめたのだと考えたほうがいい。この場合の「自分」は、多数派と一体化した自我だと理解することができる。以下、カッコ付きの自分はこの意味での自分を指すものとする。

「自分」と同じでないものが存在することに不安を感じる人にとって、身近に言語的な多様性が存在することは不愉快なことかもしれない。しかし、排除という姿勢をとる前に、それが「他人の問題」なのかどうか考えてほしい。自分と同じでない言葉をからかう人たちは、その社会の中の言語的多数派に違いない。言語的少数派が言語的多数派を言語に関してからかう状況は想定しにくい。ところで、人は生涯を通して言語的多数派であるとは限らない。暮らす社会が変わればある時点の言語的多数派が言語的少数派に転じることは十分ありえる。たとえば、「妹」をいじめた子供たちが将来アメリカ合衆国に移住した際に日本語訛りの英語をからかわれる可能性がある。自分自身が言葉をからかわれて傷つきたくなければ、他人の言葉もからかうべきではない。自分とは異なる言葉を話す人が隣にいる事実をありのままに受け入れ、たとえはじめは不愉快でも他者の言語を尊重すべきなのだ。

最近その傾向に少しかげりが出てきたとはいえ、人類は、「自分」と同じでない存在を尊重する領域を拡大してきた。信教の自由や言論の自由は、政治的・宗教的少数派と多数派の両方を尊重するものである。社会福祉も、「自分」と同じではない存在を尊重することを通して、自分自身の権利を守る活動といえる。高齢者の年金や保険を勤労者が負担するのは、高齢者を尊重するだけでなく、働けなくなった時点の勤労者の生活を守ることにつながる。障碍者が暮らしやすい社会になるよう健常者が協力することは、健常者が障碍を持つにいたった際に暮らしやすい社会を作ることにつながる。「自分」と同じでない人を尊重することは、「今ここ」ではなく未来のある時点の自分を大切にすることだといえる。言語に関して「自分」と同じでない人を尊重するのは、今述べたことと並行的なことである。何もかも多数派と同じでなければ気が済まず言語的少数派をいじめてしまう人たちは、常に人目が気になって仕方がない弱い人たちなのかもしれない。言語的多様性を受け入れる社会のほうが、そんな弱い人たちにとってもやさしい社会であることは、「自分」と同じでない存在を尊重する領域を拡大することによって自分の権利が拡大した歴史を考えれば明らかである。

ウデヘ語およびツングース諸語の現状について

風間（かざま） 伸次郎（しんじろう）（東京外国語大学講師）

ウデヘ語は10ほどあるツングース諸語の一つで、そのツングース諸語の各言語は、お互いに一つの源から分かれて来た言語であることがすでに証明されている。つまり互いに方言のようなものであるが、その違いは大きく、それぞれの言語はお互い通じないくらいに隔たっている。

周囲に圧倒的多数を占めるロシア人の存在、教育、テレビをはじめとするマスコミの影響などによって、若年層はもはやロシア語しか話さなくなっている。

人口および話し手の数はおおよそ以下の通りである。話し手はほとんど60代以上の高齢者であるため、2008年現在ではさらに減少していることが予想される。

■ 東北アジア（ロシア極東）のツングース系民族の人口および話者数

	1989年	2002年
エウェン	17000（43.9%−7463）	18642（32.6%−6080）
エウェンキー	30000（30.4%−9120）	34610（19.5%−6780）
ネギダル	600（28.3%−170）	505（6.9%−35）
ウデヘ	**2000（26.3%−526）**	**1531（9.1%−140）**
オロチ	900（18.8%−169）	426（4.2%−18）
ナーナイ	12000（44.1%−5292）	11569（26.5%−3068）
ウルチャ	3200（30.8%−986）	2718（13.4%−363）
ウイルタ	200（44.7%−89）	298（3.7%−11）

ことばの消失は話し手自身にとって、当然アイデンティティの喪失につながる。若者達は、ロシア人とははっきり異なったアジア的な顔立ちをしているにも関わらず、自らの言語や文化を失ってしまっている。彼らによれば、もっと多数で、自らの言語を保持している他の少数民族と話した時などに、そのことを特に恥ずかしく思うことがあるという。

しかし現地の経済状況や生活状況はたいへんに厳しいものがあり、言語や文化の復興などということを落ち着いて言える状況には無い。失業率は高く、伝統的な生業形態は破壊され、物価は上昇し続けている。まずさしあたって明日の生活、今月の生活の心配をしなければならない状況にある。

なお学校教育では、細々とこれらの言語の教育が続けられている。しかしせいぜい英語に次ぐ第二外国語程度の扱いしか受けていない。子供たちはほとんど自分たちの言語ができないので、まるで外国語のようにそれを学んでいる。親の世代もすでにその言語を話さないので、家庭で耳にするのは祖父母があえてその言語で話した場合のみである。残念ながらこれらの言語の未来に関しては悲観的にならざるを得ない。

以下ではツングース諸語、およびアルタイ諸言語とはどういうものであるのかについて少し触れておきたい。

ツングース諸語は、シベリアやカムチャッカ半島、サハリン、そして南は満州に至るまでの広大な地域に話されている言語群である。ツングースの諸民族の生業は漁労、狩猟・採集、トナカイ遊牧、など多岐に亘っている。それぞれの言語には、その生業を反映した豊富な語彙と、さまざまな興味深い文法現象が息づいている。国家としては、ロシアと中国にまたがって分布している。中国にはさらにソロン語、ヘジェン語、シベ語、満州語と呼ばれる言語がある。清朝を建てたのは漢民族ではなく、ヌルハチ率いるところの満州族であった。その後満州族の言語は、圧倒的な数の漢民族の言語と文化にほとんど吸収されてしまったが、他方で現在中国の共通語になっている「北京官話」は、満州人たちの話した満州語なまりの中国語といってもよいものである。

ツングース諸語は、一言でいえばわりと日本語によく似たタイプのことばと言ってもいい。述語は文の終わりにくるし、修飾語は被修飾語の前にくる。文法的な関係を示す助詞や助動詞のようなものは、一貫して単語の後ろにつける。歴史の教科書などに「日本語はアルタイ諸言語に属する」などと書いてあることがある（これは一つの仮説であって十分な証拠もなく、まだよくわかっていない）。そのアルタイ諸言語というのは三つのグループに分かれていて、ツングースはその一つである。残りの二つはモンゴル語の仲間のグループと、トルコ語の仲間のグループである。